

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	22 / 2007 / 38-44
タイトル	津軽に来てから 50 年(第 1 回)
著 者 名	葛谷孝

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

特別寄稿 津軽に来てから50年 (第1回)

顧問 葛谷 孝

何故？木造に

月日の経つのは早いもので私が津軽の木造高校に赴任してから今年の4月で満50年になる。50年というと半世紀である。この辺で過去を振り返って津軽の野生植物で印象に残ったものなどに触れてみようと思う。

津軽の人が東京に行ってもさほどニュースにはならないが、東京から津軽に人が来ると大ニュースになるらしい。少なくとも昭和30年代初めのころの木造町ではそうだった。

なぜ木造のような辺鄙な所に来たのか、と言うのが木造町の人々の関心事であったようだ。そこで最初にそのことに一言触れてみよう。

別に深い意味はない。若いうちに田舎教師を2～3年経験しておくのは悪いことではない。と言う軽い気持ちから、どうせなら遠く離れた北の田舎に行ってみたいと思った。北海道教育委員会で東京まで来てくれて採用試験を実施してくれたことがあった。旅行中で受けられなかった代わり福島県へ行って試験を受けることにした。その前に青森県でも東京で採用試験を実施するというニュースが入って来た。そこで東北の一番遠い青森県と一番近い福島県の採用試験を受けることにした。青森県の試験の合格通知が先に来た。

木造高等学校で生物の教師を探しているというニュースが友人からもたらされたので、すぐ大学の事務室に行って聞いてみたところ、どうも町立高等学校のようだが、いずれ県立に移管されるであろうと言う話であった。とにかくそこへ行くことにして手続きをすませた。その後木造高校の校長から一度会いたいので木造に来てくれないかと言って来た。昭和32年3月26日に初めて西津軽郡木造町に立ち、木造高校の校長と面接した。校長は開口一番“1年で帰らないで下さいね。”“3年はいます。”と私。木造では雪が降っていた。風花という奴だろうか。木造高校は立派な歴史をもつ県立高校であった。

東京に帰ってから、青森県指定の病院(日赤)で身体検査(健康診断)を受け、必要書類を提出し、晴れて全校集会で生徒諸君と対面したのは4月15日のことであった。

青森県に来て叱驚したことのひとつとしていつの間にか青森県生物学会の会員になっていたことである。あまりにも手際がよすぎる。もうひとつは津軽弁が難解であったことである。そこで津軽の植物に感激した本論に入る前に津軽弁で困った話を紹介する。

津軽弁のこと

昭和32年4月15日の午後のことである。木造高校の渋谷事務長さんが私のために下宿屋を探してくれていた。学校の近くの馬蹄屋さんの2階であった。下宿の主人は町会議員経験者で発音はともかく、一応通じる標準語をはなしてくれたが、奥さんは鰯ヶ沢の出身で奥さんの語る津軽弁は全く分からなかった。下宿の自分の部屋に通され、夕飯の知らせがくるまで寝っ転がってラジオを聞いていた。南部牛追い歌の哀調のあるメロディーが流れて来た。津軽にきたんだなあとつくづく感じ、

ややセンチメンタルな気分に入っていると、階下の食間から奥さんの叫び声が聞こえた。“せんせ、ママカネカー”。多分私に声をかけてくれているのだと気づいたが、ママカネカーという意味が分からない。そこで黙っていると、また“せんせ、ママカネカー”ときた。“しばらく考えてから行きます”と答えて、ママカネカーと言う意味を考えてみたが全く分からない。そのうち、奥さんが足音高く2階へ上がって来て私の部屋の障子をガラリと明け、“せんせ、なにしてるんず、ママカネカー”と言って飯を食うヂェスチャーをしたので、そのときやっと夕飯を知らせているのだと分かった。食卓に着いたら、調理する前の生の落の様に見える落が食卓の上のザルの中に入っている。下宿人は5、6人居たと思うが、皆さんザルに手を伸ばして落を手に取り、皮をむきおいしそうに食べているではないか。私は食べ物に好き嫌いは少ない方であると自負しているが、さすがに調理前の生の落は食べた事がない。すると奥さんはこれは落の1ぼん漬と言う漬物で美味しいから食べてご覧と言って皮の剥き方から食べ方まで親切に教えてくれた。なるほど落の1本漬はおいしく私の津軽の食べ物の中で5本の指に入る大好物となった。(津軽の美味しい食べ物 Best5:リンゴ、スズキの刺し身、干餅、落の1本漬、イカ素麺)。

次の日の朝、顔を洗っていると、“せんせ、ツラアラツタカー”と後ろから奥さんの声がした。私には“先生、ツララが下がっている”と聞こえた。津軽は雪国であると聞いている。初めて木造の町に来たときには風花が舞っていたが、4月16日になってもツララが下がっているとは驚きである。どこにツララが下がっているのかとキョロキョロしていると、“ツラアラツタママカネカー”と奥さんの声が聞こえた。近くにいた下宿人に津軽弁の通訳を頼んだら、ツラアラツタカーは顔を洗ったかという意味、ママカネカーは食事ですよと言う意味であるという。大分津軽弁に慣れてからママカネカーはママ(飯)クワネエカーであり、ツラアラツタカーはツラ(顔)を洗ったかーの意味である事を理解した。別に上品ぶるつもりはないが妙齢の奥さんの口から出る言葉として顔をツラと言ったり、食べませんかというのをカネカーと言うのは下品であり、22年間東京に住んでいた私にとっては驚きであった。

実験室がない!

木造高校に赴任してまず困ったのは実験室がない事である。あることはあるのだが音楽室に化けてしまっている。学生時代、教職についたらこういう実験をしよう、ああいう実験もしようと考えていた希望がすべて崩れてしまった。しかし今すぐどうなるものではなく、授業は始まっているし、この現実の中でどのような実験ができるかを考えて行かねばならなかった。そこで、最初の時間に、生徒諸君に学校には生物実験室がないこと、実験のある日は机を並び替えてもらうこと、顕微鏡観察を実験の核に据え、その他の可能な実験を計画することを話した。そこで顕微鏡を見たことがあるかどうかを挙手で聞いてみた。予想としては全員が経験がないのではないのかと思ったが、予想に反してほぼ全員が挙手した。そこで今日はレンズのはめかた、採光(絞り)とミラーの使い方などを講義した。ところが顕微鏡をみた子供達にしては一寸おかしいと思ってよく聞いたところ、顕微鏡がどういうものか見たことがあるが、壊してしまうと大変だから中学生のとき先生が使わせてくれなかったと言うことであった。私としては検鏡の有無を聞いたのだが、生徒は顕微鏡の外観を見たかどうかを答えたのである。そこで予定を変更して顕微鏡の各部分の名称、と働きを説明し、永久プレパラートを使つての顕微鏡観察の基礎を行った。卒業するまでに顕微鏡の操作だけはできるところまで指導するという目標を立てた。カエルの解剖では、水をこぼして階下から文句が来た。(ちょうど階下は職員室で、生徒が水をこぼすたびに階下へ行行って謝っていた)。生徒の中には実験・実習になると張り切り、ペーパー

テストになるとまるで駄目な者がいた。そういう生徒を救う目的で授業参加点という点数を定め、最終の成績を決めることにした。例えば『明日カエルの解剖をするので各自カエルをもってくるように』という。するとアマガエルのような小さなものをもってくるものもいればその村の主のようなヒキガエルをもってくるものもいる。もちろん大きなヒキガエルをもって来た生徒の参加点は高くなる。植物のさく葉標本を提出したものも高くなる。

この辺で失敗談をひとつ。ある日『明日はカエルの解剖をするので各自カエルをもってくるように』と言ったらすかさず、ズロスケの M がさっと手をあげて『先生、モツケだばマイネカー』と言った。モツケとは津軽弁でカエルを指すのだがそこまでは津軽弁の勉強をしていなかったので『なるべくならカエルがほしいのだけどどうしても居なければモツケでも良い』と答えたら、教室内は爆笑の渦で、それから授業にならなかった。

大滝沼の植生に感嘆

昭和 32 年 6 月上旬の土曜日、いつも世話になっている用務員の O さんが、明日暇であったらフナ釣りに連れて行ってよいと言ってくれた。場所は自転車で 1 時間ぐらいのところで、屏風山の溜池であると言う。その晩はうれしくて眠れなかった。夜明け前の 3 時ころ出発し、大滝沼というところについたのは午前 4 時頃、明るくなる前がよく釣れるらしく、しばらくは入れ食いの状態で 15cm~20cm のフナが釣れた。東の空が明るくなってくるとパタリと食いが止まってしまった。ふと沼の周囲を見回すとニツコウキスゲによく似た花が目に留まった。今まで関東周辺の植物きり見ていないので今日にしている花がニツコウキスゲだと認識するためには少々時間が必要だった。ニツコウキスゲは関東地方で標高 1000m 以上の高原(尾瀬ヶ原・日光戦場ヶ原)に生えるものと思っていた。そのとき眼前にそそり立っている岩木山が標高 2500m 以上の高山に見えた(岩木山 1625m+1000m 以上)。釣り道具をその辺にほっぽり投げて、沼の近くを歩き回って植物を観察する事でいろいろなことが分かった。すぐ近くにニツコウキスゲの大群落があり、随所にある窪地にはミズゴケ類があつて、トキソウ・サワラン・ツルコケモモを初め各種の高層湿原植物がみられ、芝草原にはオキナグサ・フデリンドウ・アズマギク・ヒメハギなどが見られた。明日学校に行ったら、科学部生物班の生徒達に今日の場所を宣伝して、何時か連れて行ってやろうと心に決めた。

次の週、科学部生物班の生徒を連れて大滝沼のある屏風山へ行ってみた。私が『野草が豊富で良いところだから期待してもいいよ。』と言ったので生徒達は期待していたようであった。『いいところだろう』と同意を得るようにすぐわきの生徒に話しかけると、その生徒は『ちっともいいところでないじゃ、おらの家の裏とふとつだねー』とうそぶいた。すばらしい大自然のなかなかにいるとそれに慣れてしまって本当の良さが分からなくなってしまうという見本を見た様な気持ちになり、ここがいかによろしい所かを大いに語った。そのうち『ケツひやつけー』という女生徒の叫びが聞こえた。近くに湿原があり、長く腰を下ろしていると湿原の水が滲みてくるのである。そこで『女の子がケツなどと下品な言葉を使わずお尻と言いなさい』という女生徒たちは『お尻ひやつけー』と言い直した。『そういうときにはお尻が冷たいわと言うのがよろしい』と指導した。やれやれ生物班の顧問と同時に言葉遣いの指導もしなければならなかった。

同じ年の 6 月下旬のある土曜日に生物班の 2 年生の班員 O 君に声をかけられた。明日良かったら長平という岩木山の登山口があるところへ案内するというので二つ返事で快諾した。下宿の奥さんが弁当を作ってくれた。五能線の鳴沢駅から長平まで歩いた。途中さまざまなチョウが飛び交い、

初夏の山野草が咲き乱れ、屏風山とはまた違った良い場所であった。しばらく夢中になってチョウを採集したり山野草を採集したりしていると、長平草原に着いた。やがて『葛谷先生一っ』と呼ぶ声が聞こえた。声のほうをみると 50 歳ぐらいの男性がニコニコしながら手を振っているではないか。顔の知らない人である。恐る恐る近づいて見ると、長平小・中学校の校長先生で、娘の藤田東生子(ときこ)の父だと自己紹介してくれた。東生子は生物の授業を受けて居る。今日は日曜日なので東生子は昨日から長平に帰っており、今日目ざとく私が生物班の 2 年生と長平へ植物採集に来ていたのを見つけて父親に報告した次第である。藤田校長から校長室に案内され蜂蜜入りのヤマブドウ酒を御馳走になり、夏休みには生徒を連れて学校の礼法室に泊まり、この辺を調べられたらどうか。普通教室にはストーブが有るからそれで炊事をすれば良いとまで言って下さった。岩木山登山を日程の中にいれた生物班のキャンプは私が木造高校を去るまで 6 年間続いた。6 年間のうち最後の 1 年は深浦の奥の方へ行った。

岩木山登山は 30 回以上

岩木山に登ったのは 1 年目の夏である。毎年岩木山の頂上で気象観測をしていた科学部気象班の顧問の先生(年齢は 50 歳を越えている)が私のところに来て、生徒の引率を頼みたいのだからのまてくれるか。生徒は自発的に行動するので、先生はただついて行ってくればよい。と言う話であり、一週間後には生物班員を引率することになっているのでその下見も兼ねて引率を引き受けた。鳴沢駅まで五能線の列車で行き、ここから長平まで徒歩である。6 月下旬に生物班の 2 年生の生徒の案内で長平にまで来たことがあるのでここは楽だった。

気象班の班長が長平で炭俵を 1 俵購入してそれを背負い、先頭に立って山を登り始めた。班員は手分けをして重い観測機材を背負ってそれに続いた。一年生の班員は自分の荷物のほかに重い機材を運んでふらふらしている。見かねて、ある 1 年生のところへ行き、先生がもってあげると言ってその重い機材をもってあげたが、その重いことには閉口した。余計なことはしないでただひたすら登って行けばよいと後悔した。頂上に二泊した。寒かった記憶があった。2 日目は嵐となった。岩木山神社の神主が、この嵐では大変だろう、嵐が収まるまで石室のほうへ来ないかと言ってくれた。そこで気象班約 10 人は私と共に石室に行った。神主は私にお神酒を進め、死なば諸共だから生徒さんにも飲ませていいだろう。と言うと生徒は大喜びで、中にはタバコを出す生徒もいた。お神酒はとにかくタバコは駄目だと言うと生徒はタバコを引っ込めた。お神酒が効いたせいか嵐も去り、頂上にあるトタン製の宿泊所で最後の夜を過ごした。

次の日は嘘の様に晴れ、一同無事に下山し、岳の旅館で朝飯を取り家路に急いだ。後で考えて見ればもし遭難でもしたら大変なことになるところだと思った。

一週間後には生物班の生徒を連れて岩木山に登った。前にも触れたが、長平小・中学校の礼法室に宿泊し、4 泊 5 日のキャンプを張ったのである。1 日目は荷物を長平小・中学校に運ぶことで費やされた。2 日目は学校の近くで綱を張って群落調査の仕方を講義した。3 日目は岩木山登山、4 日目は今までの調査の後始末と、夜はキャンプファイヤー、5 日目は下山・帰宅と言うスケジュールで、私の赴任 5 年間の岩木山登山は不思議に晴天に恵まれた。生物班員と最初に登った時、私の隣を登っていた生徒(長平を案内してくれた班員 O 君)がミチノクコザクラを教えてくれた。あまりに奇麗なのでびっくりした。群馬県の赤城山で同じサクラソウ科のユキワリソウを見た時以来の感激であった。赤城山で見たユキワリソウは疎らに数本生えていただけだったが、ミチノクコザクラは残雪の中に群

落をなしていた。私の隣を歩いていた生徒は自分の山を案内している気分であったようだ。

木造高校には実験室がない話をしたが、2 年目には野外実習を授業に取り入れることにした。当時の理科教師には実験回数を競うような所があった。1 クラス約 45 名で ABCD の 4 クラス編成なので各クラスを男女に分けて、男子組は長平へ、女子組は屏風山へ連れて行くことにした。ところが B クラスまで実施した時に指導者の私が実習場所に飽きてしまって、C クラスでは男女一緒にして岳コースから岩木山に登った。そうしたら A クラスと B クラスの生徒が不公平だと騒ぎ始め、收拾がつかなくなり、結局 A クラスも B クラスも岩木山に連れて行くことにした。まだ岩木山に登ったことのない先生方も連れて行ってくれというので連れて行くことにした。いつの間にか岩木山のガイドのようになり、見知らぬ人から電話をもらうとその大半は岩木山に登りたいのだが案内してもらえないだろうか、というものだった。そのようなグループは岳から夜中から夜明けにかけて登った。個人でも 7 月初旬、高山植物観察の為に何回か登った。そんなこんなで木造高校時代に岩木山には少なくとも 30 回ぐらいは登った。

昭和 36 年正月、上京した折りに、久しぶりで大学時代の恩師伊藤洋教授宅を訪問した。其のとき持参した屏風山の植物のカラーズライドに興味をもたれ、今年野外実習をする 2 年生にぜひ見せてもらいたいというので、木造に帰る前に大学のほうへ行って 2 年生に上映することにした。カラーズライドを見た結果学生達の希望もあって今年の植物分類学の野外実習は西津軽郡車力村の屏風山で行われることになった。

木造に帰ってからすぐに西津軽郡の理科研究会にこのことを連絡したら、宿泊所は高山稲荷に決まった。その他大学の先生がお出でになるのだから西津軽の理科の先生は特別に研修日とすることにし、移動のために小型トラックを手配してくれるという。実習は大成功裏に終わった。次の目録は生達が採集したものの中から正確なものを伊藤洋教授が記録したものである。

別表 車力村で採集した植物

次にあげる植物目録は学生が採集したもので確実なものをだけを収録した。コースや時期を変えて行けば、もっと種類数が増えるはずである。東京教育大学理学部生物学科植物学専攻、2 年 2 号、東北実習特集号 (1961 年 12 月 20 日発行)より。

○ シダ植物

トタサ科 …………… イヌドクサ

ゼンマイ科 …………… ヤマドリゼンマイ

ウラボシ科 …………… トラノオシダ、サトメシダ、ヘビノネコザ、オシダ、タニヘゴ、ミゾシダ、ナライシダ、コウヤワラビ、ワラビ、シヨリマ(ヒメシダ)

○ 裸子植物

イヌガヤ科 …………… イヌガヤ

マツ科 …………… カラマツ、クロマツ

ヒノキ科 …………… ハイネズ

○ 被子植物——双子葉類

ヤナギ科 …………… ヤマナラシ、ハクヨウ、イヌコリヤナギ

カバノキ科		ハンノキ、ハシバミ
ブナ科		クリ、カシワ、ミズナラ
クワ科		ヤマグワ
イラクサ科		カラムシ
ビャクダン科		カナビキソウ
ウマノスズクサ科	...	ウマノスズクサ
タデ科		ミゾソバ(オオミゾソバ)、ユゾノミズタデ、ミチヤナギ、イタドリ、スイバ、ヒメスイバ
ナデシコ科		ハマハコベ、オオバナミミナグサ、カワラナデシコ、オオヤマフスマ(ヒメタガソデソウ)、ハマツメクサ、ノミノフスマ
スイレン科		コウホネ、スイレン
マツモ科		マツモ
キンポウゲ科		サラシナショウマ、ボタンヅル、ウマノアシガタ、キツネノボタン、アキカラマツ
アケビ科		ミツバアケビ
メギ科		ヒロハノヘビノカラズ
ツツラフジ科		アオツツラフジ
モクレン科		コブシ、ホオノキ、マツブサ
クスノキ科		オオバクロモジ
ケシ科		クサノオウ
アブラナ科		ハタザオ、ハマハタザオ
モウセンゴケ科	...	モウセンゴケ
ベンケイソウ科		キリンソウ
ユキノシタ科		ウツギ、ノリウツギ、ツルアジサイ、イワガラミ、
バラ科		キンミズヒキ、クロバナロウゲ、ダイコンソウ、キジムシロ、ミツバツチグリ、カマツカ、オオヤマザクラ、ウワミズザクラ、ノイバラ、ハマナス、ナワシロイチゴ、ナガボノシロワレモコウ、ナナカマド、アズキナシ
マメ科		ハマエンドウ、ヒメレンリソウ、ヤマハギ、メドハギ、ミヤコグサ、センダイハギ、アカツメクサ、ツルフジバカマ、ヒロハクサフジ
ミカン科		サンショウ
ニガキ科		ニガキ
ヒメハギ科		ヒメハギ
ツゲ科		フッキソウ
ウルシ科		ヤマウルシ
モチノキ科		イヌツゲ、ウメモドキ
ニシキギ科		ツルウメモドキ、コマユミ、ヒロハツリバナ、ツルマサキ
カエデ科		イタヤカエデ
トチノキ科		トチノキ
ツリフネソウ科		ツリフネソウ、キツリフネ
クロウメモドキ科	...	クマヤナギ、クロウメモドキ
ブドウ科		ノブドウ、ヤマブドウ、エビズル
シナノキ科		シナノキ
マタタビ科		サルナシ
オトギリソウ科		オトギリソウ、ミズオトギリ
スミレ科		スミレ、アギスミレ、イソスミレ、タチツボスミレ
グミ科		アキグミ

- ミソハギ科 …… エゾミソハギ
- アカバナ科 …… アカバナ、マツヨイグサ
- アリノトウグサ科 …… アリノトウグサ、ホザキノフサモ
- ウコギ科 …… ウコギ、ケヤマウコギ、タラノキ、ハリギリ、センノキ、ケハリギリ、トチバニンジン
- セリ科 …… アマニュウ、ドクゼリ、ハマゼリ、ハマボウフウ、ヤマチドメ、イブキボウフウ、セリ、ムカゴニンジン、オヤブジラミ、ヤブジラミ
- ミズキ科 …… ヒメアオキ
- ツツジ科 …… ツルコケモモ、ナツハゼ
- サクラソウ科 …… オカトラノオ、コナスビ、クサレダマ、ヌマトラノオ
- エゴノキ科 …… エゴノキ、ハクウンボク
- モクセイ科 …… ヤチダモ、コバノシジノキ、イボタ
- リンドウ科 …… リンドウ、ミツガシワ
- ヒルガオ科 …… ハマヒルガオ
- ムラサキ科 …… ホタルカズラ、ハマベンケイソウ、スナビキソウ
- クマツヅラ科 …… ムラサキシキブ
- シソ科 …… キランソウ、クルマバナ、ムシヤリンドウ、ホトケノザ、メハジキ、シロネ、ハッカ、ウツボグサ(シロバナウツボグサ)、イヌゴマ
- ハマウツボ科 …… ハマウツボ
- タヌキモ科 …… コタヌキモ
- オオバコ科 …… エゾオオバコ、ヘラオオバコ
- アカネ科 …… クルマバソウ、キバナノカワラマツバ、オオバノヤエムグラ、ホソバノヨツバムグラ、アカネ
- スイカヅラ科 …… ヒョウタンボク、ガマズミ、カンボク、ヤブデマリ、ハコネウツギ
- オミナエシ科 …… オトコエシ
- キキョウ科 …… ツリガネニンジン、サワギキョウ
- キク科 …… ノコギリソウ、シロヨモギ、オトコヨモギ、アズマギク、ゴマナ、シラヤマギク、ヨブスマソウ、チチコグサ、ヤナギタンボク、ニガナ(シロバナニガナ)、ハマニガナ、コウゾリナ、ハンゴンソウ、アキノキリンソウ、カワラヨモギ

○ 被子植物――単子葉類

- ヒルムシロ科 …… エゾノヒルムシロ
- オモダカ科 …… ヘラオモダカ
- イネ科 …… アオカモジグサ、ヌカボ、ハルガヤ、オオカニツリ、トダシバ、スズメノチャヒキ、カモガヤ、ハマニンニク、オオウシノケグサ、チガヤ、ケカモノハシ、サヤヌカグサ、ドクムギ、ネズミムギ、コメガヤ、ススキ、ネズミガヤ、クサヨシ、オオアワガエリ、アシ、スズメノカタビラ、ナガハグサ、ネマガリダケ、カニツリグサ、シバ
- カヤツリグサ科 …… コウボウムギ、コウボウシバ、アゼスゲ、カワラスゲ、シラギシスゲ、ゴウソ、オニナルコスゲ、シオクグ、チャシバスゲ、カサスゲ、タガネソウ、オオカサスゲ、ワタスゲ、フトイ、ウキヤガラ、アブラガヤ
- サトイモ科 …… ミズバショウ
- ツユクサ科 …… イボクサ
- イグサ科 …… イ、イヌイ、クサイ、スズメノヤリ
- ユリ科 …… エゾネギ、ノビル、ギョウジャニンニク、ホウチャクソウ、タチギボウシ、スカシユリ、タケシマユリ、クルマユリ、マイヅルソウ、ツクバネソウ、オオアマドコロ、ヒメイズイ、サルトリバラ、サルマメ、シオデ、タチシオデ、エンレイソウ
- アヤメ科 …… カキツバタ、アヤメ、ノハナショウブ
- ラン科 …… コアニチドリ、サワラン、カキラン、ミズチドリ、トキソウ(シロバナトキソウ)